

「支えられた」経験から「支える」人に

新潟県柏崎市立高柳中学校

一年 春日 桜

小学校生活最後の一年、悔いの残らないように何でも頑張りたい！

小学六年に進級した春、私はやる気に満ちあふれていた。しかし、その気持ちはすぐに打ち消されてしまうことになる。

四月の体育の時間だった。体育館で走っていると、「ベキッ。」

と腰の辺りで音がしたような気がした。その時はあまり痛みを感じなかったが、日が経つにつれ、痛みが増してきた。五月に入り病院で診察をしてもらうと、医師は言った。

「疲労骨折ですね。」

続けて医師は言った。

「しばらく運動は避けてください。」

私は言葉を失った。信じられなかった。同時に、今まで満ちあふれていたやる気や希望が燃え尽きたろうそくの火のように、すっと消えてしまった。

「どうして…？ 休み時間は遊べないの？ 体育は？ 何もできないじゃない！」

疑問と絶望が心の中でループする。

「でも、今ちよつとだけ我慢すれば、動けるようになるかもしれない。」

少し楽観的にも考えた。しかし、一カ月経っても腰

の痛みは消えてくれなかった。

「いつになったら治るの？ まだ我慢しなくちゃいけないの？」

気持ちは焦るばかりだった。早く思いっきり体を動かして、みんなと活動したい！ 楽しい思い出をいっぱい作りたい！

ある日、ついに我慢の限界がきてしまった。私は医師の許可が出ないまま、友達と思いつき走り走って遊んだ。楽しかった。すると、学級担任が私を呼んだ。

「桜だけじゃなくて、家族だって同じ気持ちでいるんだよ。我慢しなきゃ。」

言われたその時は、そのとおりだな、と反省し、その後、我慢して安静に過ごした。

七月に入り、運動会の準備が始まった。私はという、まだ運動は禁止されていた。私は、くよくよしていても仕方がないから、自分にできることを一生懸命にやるう、と心に決めた。応援団長をサポートするために、応援歌を考えたり、振り付けのアイデアを出したりした。

夏休みが終わり、いよいよ、運動会のリハーサルの日。運動ができない私は、

「小学校最後の運動会に参加できないなんて。みんなはいいな。私も走りたいな。」

そんなことを心の中でつぶやきながら、見学していた。その時、担任の先生が話しかけてくださった。いろいろと話しているうちに、私は今までため込んでいた思いが爆発し、涙があふれてきた。

「泣いておいで。」

担任の先生が優しく声を掛けてくださった。今まで泣くことは良いことではないと思っていた私は驚いた。と同時に、大粒の涙が次から次へとこぼれ落ちた。こんな感覚は初めてだった。そして、続けて先生はおっしゃった。

「泣くことは、笑うことと同じくらい大事なことなんだよ。」

この言葉は、硬くなっていた私の心を和らげてくれた。体もふつと軽くなった気がした。

運動会では、なんと私たちの軍が応援賞をとった。嬉しかった。競技ができない分、応援で頑張ってきたことが、みんなの役に立って報われた気がした。

「この応援賞は、桜のおかげだよ。」

担任の先生も私に言ってくくださった。また、涙があふれてきた。

運動会が終わっても、相変わらず私は体育の授業を受けられないでいた。ある日、教室で自習をしていると、担任の先生が一本のボールペンを見せてくれた。ボールペンには、「しあわせはいつもじぶんのころがきめる」と書いてあった。相田みつをさんの詩だ。言葉の意味はすぐには理解できなかったが、帰宅後、自分なりに考えてみた。

「何でも悪い方に考えず、前向きに、明るい方に考えるってことかな。」

小学校を卒業する頃、ようやくスキーや縄跳び、鬼ごっこができるまで回復した。

私は、この六年生の一年間、とても苦しい思いをした。でも、それと引き換えに、たくさんのお話を学ぶことができた。それは、自分はその人の人に支えられ、愛されていること、「前向き」という言葉は口で言うのは簡単だけど、実践するにはたくさん努力が必要なこと、そして、自分の弱さをさらけ出すことで強くなれること、など。

これらの経験を生かして、今度は私が人を支えられる人になりたい。相手の気持ちを知るために話をよく聞いて、寄り添える人になりたい。辛い思いをしている人が、少しでも明るい気持ちで過ごせるように。